平成２９年度宮城県多賀城高等学校入学式式辞

４月は桜の季節であるとともに，冬に葉をおろした木々が再び芽吹き，新緑が山々を彩る季節です。全ての生物（いきもの）が，冬の間にため込んでいた力を一気に解き放ち，柔らかな日差しを受け花々が咲き誇り，木々は新しい葉を盛んに伸ばします。まさに春は新たな成長と繁栄の時です。

平成２９年度多賀城高等学校の第４２回入学式を挙行するにあたり，多数のご来賓，保護者の皆様にご臨席を賜り，新入生の皆さんをお祝いできますことは，私ども職員，在校生にとりましても，この上ない慶びでございます。皆様に心から御礼を申し上げます。

ただ今入学を許可された普通科２４０名，災害科学科４０名，合計２８０名の新入生の皆さん，ご入学おめでとうございます。ならびに保護者の皆様，お子さまのご入学，誠におめでとうございます。

本校は，昭和５１年４月の創立以来，約 13,000 名の卒業生がこの校舎から羽ばたき，各界各地で社会を担って活躍しています。創立４１年目の昨年，防災系専門学科としては全国で二例目の「災害科学科」を開設することにより，新しい一年目がスタートいたしました。今年度は，これまで以上に地域の進学校としての使命と責任を自覚し，この新しい二学科体制を成熟させたいと考えております。生徒の「誰もが未来を創る能力（ちから）」があることを信じ，宮城県や東北の復興はもとより，社会の変革そのものを先導するパイロットスクールとしての役割を果たしてまいります。

さて，本校では時代の変化に伴い「課題の発見と解決に向けて主体的・協働的に学ぶ学習」に重きを置き，様々な教科や総合的な学習，課外活動で「受身」の学習から「能動」の学習への転換を図っています。つまり自ら学び続け，時代を切り開く力を身に付けて欲しいと考えています。

日本は今「生産年齢人口の急減，労働生産性の低迷，グローバル化・多極化の時代を迎えている」と言われています。アメリカのデューク大学の研究者であるキャシー・デビッドソン教授は，「２０１１年度にアメリカの小学校に入学した子どもたちの６５％は，大学卒業時に今は存在していない職業に就くだろう」との仮説を立てています。イギリスのオックスフォード大学で人工知能の研究を行うマイケル・Ａ・オズボーン准教授は「コンピューターの技術革新がすさまじい勢いで進む中で，これまで人間にしかできないと思われていた仕事がロボットなどの機械に代わられようとしている。今後２０年程度で，アメリカの約４７％の仕事が自動化される。」と述べています。皆さんもテレビで見たことがあると思いますが，十年前にはできなかった自動

車の自動運転は既に現実のものとなりました。このシステムによって，少なくとも１０を超える職種がなくなると言われています。また，囲碁や将棋では人間を超える結果を残し，これまでコンピュータが不得意とされてきた場面認知における最善の解の選択もできるようになってきました。

これまでの学びは，専門的な学問を学ぶ大学を頂点とし，必要な知識や技能を段階的に積み上げていくものでした。しかし，職業が安定したものでなくなるとすれば，学びにも大きな変化が必要です。これからは複雑に変化し続ける中で，新しいものを学び続けること，そして時には，既成概念に捉われない学びが必要となってきます。これからの時代は先の見えない，答えのない時代です。日々，自分で疑問を持ち，そこから課題を見いだし，他の人たちと協働して答えの見当をつけ，その答えが正しいかどうか確かめながら判断する学びが求められているのです。本校の取り組む学習は，このような新しい学びを目指すものです。

東日本大震災以降，本校では被災地にある学校として「命と暮らしを守る」ための防災・減災学習に真摯に取り組んでまいりました。大学や研究機関さらには企業と連携した特別授業の実施，フィールドワークを取り入れた科目の開設，情報活用能力を重視したＩＣＴ教育の推進，ユネスコスクール加盟に見られる国際理解学習，地域と連携したボランティア活動，全国の高校生との交流など，多岐にわたる学習活動を展開してまいりました。これらのさらなる発展が新たな学びにつながるものと確信しております。

新入生の皆さんのほとんどが在学中あるいは卒業するまでに，選挙権を持つ社会の一員となります。まさに，数年後には社会を創る主人公になるのです。私は皆さんが本校で学ぶことで，未来を創る能力を高めていくことを願っております。今日を迎えられたこと，そして新たな学習環境にいることに感謝し，しっかりと高校生活に励んでください。

新入生の皆さんが，新たな未来の創造者になることを願って式辞といたします。

平成２９年４月１０日

宮城県多賀城高等学校長

佐々木　克敬